

ペア科目を活かしたカリキュラム開発

研究代表者	上垣 豊 (法学部)
共同研究者	田口 律男 (経済学部)
	小長谷 大介 (経営学部)
	谷垣 岳人 (政策学部)
	東山 薫 (経済学部)
	竹内 綱史 (経営学部)
	入谷 秀一 (文学部)

1. 龍谷大学では、国内ではユニークな週2回の講義科目(「ペア科目」)が存在する。ペア科目に関するFDは今年度で三年目である。これまでの2年間でペア科目の教育効果を理論と実践の両面で確認し、ペア科目の実践例を通して、活用の仕方について検討してきた。申請にあたって、今年度はペア科目を活かしたカリキュラム開発をテーマにして下記の取り組みをおこなうこととした。

- (1) 外部から講師を招いて研究会を開催する。
- (2) 京都学舎でのカリキュラム改革の経緯を、前年度の研究成果から学ぶ。
- (3) 新旧カリキュラムでのペア科目受講者の変化を調べる。
- (4) 2019年度実施をめざして、ペア科目を活かしたカリキュラム案を考える。
- (5) 通年科目とペア科目のそれぞれの利点を比較検討する。
- (6) PJメンバーの間で具体的経験をだして議論し、ペア科目の効果的な活用の仕方を検討する。

また、以下のような到達目標を掲げた。

- (1) ペア科目を活かしたカリキュラム開発のための課題を明らかにする。
- (2) 新旧カリキュラムでのペア科目受講者の変化を明らかにする。
- (3) 2019年度実施をめざして、ペア科目を活かしたカリキュラム試案を作成する。
- (4) 具体的経験をもとに、ペア科目の効果的な活用方法を例示できるようにする。

2. 不十分なものもあるが、ほぼすべての取り組みを実施した。研究会については外部の講師を招いた公開研究会を1回(11月30日)、他にペア科目の実践報告会を1回(2月27日)に実施した。公開研究会の概要は添付したテープ起こしの要旨を参照されたい。実践報告会の開催要項は下記のとおりである。

2月27日(火) 午後4:00～5:30

場所 紫英館2F第2会議室

〈報告者とタイトル〉

中野寛之先生 「授業の実践報告～初年度を終えて～」

村岡倫先生 「学生にとってのペア科目 研究者にとってのペア科目」

〈コメンテーター〉

中田裕子先生

中野先生の報告は、着任されて初めて経験するペア科目の授業の実践を報告したものであり、教える側の印象と学生の感想、定期試験の成績などでは、他のペア科と共通するところが多かった。今年度は、毎回ミニレポートを課しており、そのため、教える側が大変な負担になった。討論のなかでは、教える側の負担を軽減する方策について、いくつかアドバイスがなされた。村岡先生の報告では、週1回と2回では、教える内容に格段の差があり、とくに基礎的な知識を欠いた学生が多くなっている現状では、ペア科目が有効であることが指摘された。また、週2回の授業を準備するのは大変であるが、同時にかなり広い範囲の内容、直接の研究対象以外のことも知っておかねばならないので、研究者にとっても大変良い勉強の機会となり、その後の研究生生活に大いに役に立つことが強調された。

取り組みの(3)については、子細な検討を行う時間的余裕がなく、また予備登録のかけ方が2015年度実施のカリキュラム改革後に変化しており、単純な比較対象は困難であることもわかった。それでも、コマ数の変更を迫られるほどの大きな増減はなかったことは指摘しておきたい。取り組みの(5)は、昨年11月に開催された公開研究会での國松報告(下記の公開研究会の要旨を参照)のなかで示されている。

到達目標の(1)(3)については、学問分野ごとに抱えている課題に違いがあり、人文化科学系あるいは自然科学系全体の課題の明確化や、詳細なカリキュラム改革試案の作成までには至らなかったが、「深い学び」を実現できるペア科目の利点を生かして、各学問分野の入門科目的な科目をペア科目化するのが有力な案として考えられる。

3. 最後に、2017年11月30日に開催された龍谷大学 FD公開研究会の開催要項と、テープ起こしの要旨を掲載しておく。

開催要項

タイトル	ペア科目を活用したカリキュラム開発
内容 (300 文字程度)	追手門学院大学から池田輝政先生をお招きして、ペア科目を活かしたカリキュラム開発実践的な活用方法をテーマにしてFD 報告会を開催します。報告者は経営学部の竹内先生と、文学部の國松先生、政策学部の谷垣先生のお二人で、竹内先生が宗教学を中心に人文科学系科目について、國松先生と谷口先生が人類学、生物学を中心に自然科学系科目について報告します。その後、池田先生にコメントをいただき、追手門学院大学での取り組みや全国の動向を紹介していただきます。
開催日	11 月 30 日(木)
時間	16 :40～18 :15
開催場所	和顔館 4 階会議室 2
対象	本学の専任教職員（特任を含む）・非常勤講師 学外者も可
報告者 (職位、所属)	1. 竹内綱史（経営学部 准教授） 國松豊（経営学部 教授）、谷垣岳人(政策学部 講師) ディスカッサント 池田輝政 先生 (追手門学院大学基盤教育機構長／学長補佐／アサーティブ研究センター長) 「教養教育科目とアクティブラーニングの実現」

【テープ起こし要旨】

ペア科目を活用した人文科学系 教養科目のカリキュラム改革
 ～「宗教学」を中心に～
 【経営学部 竹内綱史】

私の担当の「宗教学」を中心に教養の「人文科学系」のカリキュラム改革、ないし開発についてお話をさせていただきます。

今年の2月に同じFDの報告会で「ペア科目のメリット・デメリット」の報告をさせていただきました。その時に、メリットとして挙げたのは、まずは授業時間数が倍だから教える内容はより充実させることができるということ、それから週2回は記憶を定着させる上で明らかにメリットがあること、3つめは、時間的に余裕をもった形で時間配分できることです。例えば私の場合は「映画をまるまる1本見る」ことも授業でしています。

2015年度から新カリが動いています。その時に宗教学の科目数と編成をかなり修正しました。旧カリでは平均して1科目300人ぐらいの大講義でした。「宗教学入門」「世界の宗教A」「世界の宗教B」が半期2単位の科目です。ペア科目として「宗教と文化」があり、2回生以上配当でした。新カリでは、「宗教と文化」を廃止し、「宗教学入門」をペア科目にして、1回生以上配当にしました。「世界の宗教」は科目名称を「宗教の世界」に変えました。そして「人文科学セミナー」は宗教学特有の科目ではないのですが、私も担当することになっています。これは宗教学の少人数セミナーで、学生に色々発表させながら、比較的アドバンストな内容の授業で、通年4単位科目になっています。

カリキュラム変更の理由ですが、まず入門科目をペア科目にして手厚くしたいというのがありました。私の考えでは入門科目をペアにするのがベストではないか思います。特に宗教学に関してはほぼ100パーセントの学生は高校までに学んでいない科目です。例えば宗派系の学校に通っていた学生でも、宗派の内容は知っていても、学問としての宗教学は全然知らない、想像もつかない科目だったりします。それで、「宗教学入門」をペアにしました。

2点目は旧カリには「宗教と文化」という科目がありましたが、類似科目が他になく、宗教学という分野の、2回生以上配当のペア科目になっていました。以前は教養ゼミの科目だったようなことを聞いたことがあります。ところが、私が着任した時は、半期4単位のペア科目になっていて、平均すると200人ぐらいの学生がくる大講義科目でした。2回生以上なので、少し発展的な事をしたいと最初の頃は思っていたのですが、大講義科目ですし、他の宗教学系の科目を取ってくる学生はあまり多くなく、やりにくかった面がありました。

3点目は「世界の宗教」の科目名称を変えたことです。これは学問的な理由もあります。一つは「世界の宗教A」は日本の宗教を扱うことになっているのに、「世界の宗教」というタイトルになっており、それでいいのか、ということがありました。もう一つは、1990年代以降は宗教学では宗教概念論というのが世界中で流行って、宗教の定義がかなり曖昧になったのです。それでキリスト教、イスラームとか、宗教を紹介するよりは、何か宗教っぽいものと、宗教と非宗教の間みたいな、例えば日本だと、「パワースポット」のようなもの、多くの人は宗教とは思っていないけれど、宗教学的には宗教の一種と言えるものを扱うことが多いので、科目名称を変えてみました。

コンセプトの4つ目ですが、人文科学系全体として科目数を減らしてコマ数を維持する、複数開講をして、色んな科目がかなり非体系的に増えていったものから科目数を整理するという大方針にしたがい、「宗教と文化」という中途半端な科目をなくしたという訳です。

新カリは2015年から開始で、3年目になり、現在、ペア科目の「宗教学入門」が前後期1コマずつ、「宗教の世界A」「宗教の世界B」が前後期3コマずつ開講されています。今後の課題として、コンセプトに沿うならば、「宗教学入門」を複数開講にする方がいいのではないかという気はします。入門科目を学生に多く受けて欲しいからです。

「人文科学セミナー」に関しては、先修制をとっていませんので、他の宗教学の科目を受けていなくても、受講したい学生を受け入れています。私が担当をはじめたのが今年からですが、履修生の数が少

ないし、まだ傾向が掴めないのですが、希望としては他の宗教学科目を履修した後に、より深い学修を求める学生が受ける、そういう場所にしたいです。

なお、人文科学系全般に関して、個人的意見ですが、学問分野ごとに「入門」「A」「B」「セミナー」というようなユニットを作って、その中で初級科目をペアにする、という形にするのが良いのではないかと考えています。宗教学は、まさにそういう形に2015年にしたという事です。ただ、学問分野によっては、何々学入門みたいなのが必ずしも初級とはならない可能性もあります。その場合は学生にとって最初にとっつきやすい科目をペアにしたらいでしょう。私が念頭に置いているのは歴史ですが、具体的な歴史の話をする方が多分学生にとっては近づきやすく、「史学入門」の方が難しそうな感じがします。いずれにせよ、学問分野ごとにユニットにして、全体を体系化することが出来るのではないかと考えています。

学問分野として人文系は結構幅広く、「哲学」「倫理学」「美学」「論理学」「西洋史」「東洋史」「日本史」「西洋文学」「東洋文学」「日本文学」「教育学」「心理学」「宗教学」など全部で13くらいあるのですが、それぞれユニットを作って全体を体系化することが望ましいのではないかと。その場合、当然ペア科目とセミナーに関しては専任教員が担当するのが望ましいのですが、そうすると、そもそも人が足りない。それをどうすればいいのか、考える必要があると思います。

入門科目の「宗教学入門」ですが、ペア科目化は手応えを感じています。宗教現象ないし宗教への学問的アプローチを学生に体得してもらうということですが、それには「宗教学入門」がペアになっているのは良かったかなと思っています。

宗教現象への学問的アプローチを身につけるというのが、教養科目としての宗教学の一つの目的だと思いますが、学生に最初に宗教の話をする、必ず強いプラスか強いマイナスの反応しかしません。宗教学は学問である以上、中立的・客観的を目指すわけです。例えばオウム真理教の話をするとか、あるいは浄土真宗の話をするとかの時であっても、中立的であり客観的であることを目指す。学的態度みたいなものを身につけるまでいなくても、感じ取ってもらえるように、そういうことがある程度、入門科目で出来ている、手ごたえを感じています。

ただし、「宗教の世界A」とか「宗教の世界B」もペア化したらいいかと言うと、アンケートをみると、週2回4単位科目だと他の科目はあまりとれなくなるということデメリットとしてあげる学生も結構います。数多く幅広い科目をとれることを確保するためにも、何でもペア化すればいいということではないのではないか、と思います。

最後ですが、教養科目、教養教育は知を深めるのと広げるという方向の両方あると思いますが、入門科目のペア科目化は、前者のみならず、両方向にメリットがあるだろうし、「宗教学」に関しては、学生のほとんどが今まで学んだことのない学問なので、最初にじつくりと、学的態度に触れる時間をとれるというのは、良いことではないかと思っています。

自然科学系 教養教育科目（京都学舎）におけるペア科目の現状
～自然史分野を中心にして

【経営学部 人類学・生物学系科目担当 國松 豊】

今日は、京都学舎における自然科学系のペア科目の現状についてお話させていただきます。自然人類学、生命科学的、生物学的なもの、そして地学、これを今日のところは自然史分野と呼びたいと思います。

1回生から受講できる科目は、「環境学」、「地球の科学」、「人類学」、「人類学のすすめ」などです。生物学は、「生物科学のすすめ」、「生態学のすすめ」、「里山学」などがマクロ的な内容、「生

命科学のすすめ」がミクロ的な内容を取り扱っています。日本の自然は、地学系もあれば生物学系もある複合的な科目になっています。

教養科目は、2015 年度の改革で、基幹科目という科目を人文、自然、社会のそれぞれの分野で作ри、その中から最低 2 単位ずつ取ることになりました。基幹科目は自然史分野ではすべて 4 単位、数学系と自然科学史系では 2 単位、天文・物理系では 4 単位科目と 2 単位科目が混在しています。4 単位の基幹科目は、だいたいペア化されていますが、自然史分野では一部通年クラスが残っています。「環境学」の場合、自然科学系の内容と社会科学系の内容で、火曜日は自然科学系の担当者が、金曜日は社会科学系の担当者が行う形になっています。

現在進行中の教養改革の方針として、通年 4 単位の科目を廃止して、2 単位科目を 2 つに分割するか、4 単位のままでペア科目として半期で終わるようにしなさい、というように求められています。すべての科目をペア化した場合、結構問題があります。ペア科目だと他の講義との関係で受講できないなどの理由で、通年の方がいいという学生も結構います。教員についても同じことが言えて、時間割構成の制約が大きくなります。専任教員の場合はまだしも、非常勤講師の先生にそれをお願いするのは、非常に困難です。

4 単位科目を 2 分割した場合の問題は、京都学舎(深草学舎と大宮学舎を合わせて京都学舎と呼ぶ)は文系学生のみですので、教養で自然科学系の単位を取るのには、自然科学の内容を学ぶ、人生でラストチャンスになるかもしれません。そうすると、この機会に。ある程度まとまった内容を学んだ方がいいのではないかと考えられます。しかし、例えば「人類学のすすめ」の 4 単位を「人類学のすすめ」の「A」と「B」に分割すると、かなりの確率でどちらか片方しか取らない学生が出るでしょう。これで教育上いいのかなと思います。ただ、時間割の編成とか非常勤講師依頼など、実務的な問題は、かなりやりやすくなります。

私の担当した「人類学のすすめ」でアンケートをしました。「人類学のすすめ」は、自然人類学の人類とか霊長類の生物学的な側面とか、化石の話など古人類学の話題が講義の内容になっています。基幹科目に指定していて 4 単位 30 回です。全部で 4 クラス複数開講していて、ペア科目が 3 クラス、一つだけ通年クラスを維持しています。私以外に、非常勤講師に、1 から 2 クラスを分担してもらっています。人類学の分野は就職口がなくて、長いポストク期間を過ごしているという人もいるので、今のところ非常勤をお願いできています。ただし、これがいつまで続くかというのはわかりません。ある日突然破綻するかもしれません。

私が担当している半期ペアと通年のクラスで、受講生にアンケートを取ってみました。半期ペアのクラスで、なぜ半期を選んだのかという問いには、集中して学習するので記憶に残りやすい、という学生が結構いました。他には、半期で済ませたい、前期はこの授業に気付かなかったという学生もいます。前期に基幹科目を取らなかったのが後期に取ることにしたとか、たまたま後期に月 3・木 3 が空いていたので取ったとか、時間割の都合で通年のところが空いてなかったという学生も結構多くいました。

通年クラスでは指向性が違い、ゆっくり詳しく学べるからいいという学生が結構います。週 2 回ではついていけない、半期ペアクラスに気付かなかった、たまたま予定が合ったから、など時間割の都合で通年を選んだという回答もありました。後期のペア科目を受講した文学部 1 回生の回答で、通年では前期の始めに登録するので、特にあまり魅力を感じなかった科目でも、半年すごして後期になると考えが変わるかもしれないので、「人類学のすすめ」を 2 パターンつくったら良いのではないかと、という意見がありました。

開講形式による学部の偏りが気になっています。今年の「人類学」は、通年クラス、前期ペアと後期ペアとで、受講生がそれぞれ 151 人、209 人、309 人。去年もそうですが、通年クラスで文学部の比率が突出して高いのです。前期ペアも後期ペアもが文学部の学生は 4 分の 1 くらいですが、通年クラスは 4

分の3近くが文学部になります。専門の講義の関係で、ペア科目は取りにくいのかな、という気もするのですが、どうなのでしょう。

村岡先生(文学部)：他の学部はだいたい基礎演習的な科目は前期で一回終わっています。文学部だけが全学生が基礎演習は通年なので、通年に慣れているというか、そういうものと思っているのかも知れない。

国松先生：3回生だけ抜き出すと、通年11人、前期ペア59人、後期ペア32人、そのうち文学部が、5人、5人、1人で、学生の全体の中での3回生以上の割合は前期ペアでは28.2パーセント、他が10パーセントくらいです。前期ペアが突出して多い。3回生以上の学生のなかで文学部の3回生以上の学生のパーセンテージは、他の形式に比べると通年で圧倒的に高い(45%)。高学年になると、文学部の専門の方の講義が増えて、ペア科目だと取りにくい学生が増えるのではないかと思います。

文学部生で基幹科目の未修得が多いのではないかと問題になりました。そこで非常勤講師の先生をスカウトして、今年度前期に大宮で基幹科目の自然科学史を開講しました。しかし、登録したのがたったの7人という惨憺たる結果でした。しかも基幹科目を取っていないから登録したのではなく、内容に興味があるから登録したという、ある意味で正しい選択ですが、科目の設置目的は果たしていません。わざわざ大宮学舎に高学年で基幹科目を取れていない学生への対応策を採るのは、焼け石に水のような気もしないでもありません。

学生の指向性も都合も様々です。集中した方が自分は勉強できる、というタイプの人もあるし、一年かけてゆっくりじっくり学びたいという人もいます。時間割等の都合にしても、短期間の方がいい場合もあるし、通年の方が良い場合もある。教員にとっても同様です。特に非常勤の先生に頼むという場合には、半期ペアだけにするとかなり運営に支障が出るのではないかと懸念があります。複数開講している場合は通年と半期ペアを組み合わせて、柔軟に対応できる様なシステムにするのが現実的にも望ましい対応ではないかと思います。

ペア科目に関するアンケート調査

【政策学部 谷垣岳人】

「生態学のすすめ」でペア科目に関するアンケートをweb上で取りました。アンケートを取った科目は一般教養の基幹科目で、以前は通年で展開していたものを今年の前期、初めてペア科目にしました。受講生は146人です。2016年度までは週1回の通年科目でしたが、2017年度の前期に週2回のペア科目にしました。成績評価は、定期試験50%で平常点30%、「龍谷の森」で実施する野外実習のレポート20%です。

平常点は毎回B6サイズのコメントペーパーに講義の要点や感想を、裏面に感想を書いてもらいます。毎回手渡しで受け取り、次の講義の時に回答します。野外実習に参加した学生はA4 1枚の参加レポートを提出します。参加できない学生は、地域の自然観察会または環境ボランティアに参加してレポート1枚。それでもできない学生は、生態学関連の本の要約をA4 3枚書くように求めています。

manabaを使ってアンケートを取りました。設問は田口先生が作られたアンケートと同じです。週2回の授業ペア科目という形式についての満足度は？という質問に対して、「満足」が35%、「やや満足」が38%、「普通」が21%、「やや不満」が5%、「不満」が1%。7割くらいが満足しているという結

果でした。「やや満足」、「満足」と回答した学生にその理由を尋ねると、一番多かったのが、「単位数が大きい」で、26%です。2 番目は「深く学ぶことができる」「理解を深めることができる」、3 番目が「内容を忘れにくい」16%、4 番目「週 2 回のペースがちょうどいい」、「適当な頻度である」で 17%。あとは、「色んな科目を一度に勉強しなくてもすむ」、「定期試験の負担が少ない」が 13%、「週 1 回の授業よりもフィードバックが早い」が 8%でした。ペア科目化は内容理解の定着を促進していると考えられるアンケート結果でした。逆に「不満」と回答した学生にその理由を訊くと、一番多かったのが「4 単位を一度で落とすリスクがある」(4 名)、次は、「多くの種類の講義を受けることができない」「他の科目と重複して取れない」。あとは「予習復習の時間が十分に取れない」、「週 2 回は多い」。

開講形態と受講生の合格率ですが、2015 年と 2016 年は通年で開講しました。受講者数は非常に多くて 260 名と 350 名でした。受講生の中には最初ちょっとだけ出て来て、あと全然出て来ない、という、点数で言うと 10 点に満たない学生がいます。10 点以上とった学生の割合は、通年では 9 割前後でしたが、ペア科目にすると 96%に上がりました。ペアにしたことで脱落者が多少減ったことがわかりました。60 点以上の合格者は、2015 年、2016 年は 8 割前後でしたが、ペア科目にしたら 9 割ぐらいになりました。

「生態学のすすめ」ではペア科目化すると、脱落者がやや少なくなり、内容理解の定着が促進されました。通年だと質問への回答が翌週になり、質問した学生も何を質問したか忘れていますが、ペア科目だと数日後に答えが返ってきます。質問をちゃんと先生が見てくれているという実感を持てるので、質問の数もグッと増えます。また、週 2 回顔を合わせることで学生との距離がすごく近くなった印象を持ちます。通年科目の時は人数が多かったので manaba course を使って出席管理をしていました。そうすると、学生と直接的なやりとりがほとんどなかったのです。ペア科目で人数を 150 人に制限し、毎回、代返対策をかねて、手渡しでコメントペーパーをもらうようにしています。そうすると「ありがとうございました」と挨拶する学生も多く、手渡しの方が、心がほっこりとして、距離感も縮まった印象を持ちます。

「教養教育科目とアクティブラーニングの実現：カリキュラム設計の次元に立つて」

【ディスカッション 池田輝政（追手門学院大学）】

学生のために面白いカリキュラムを作っていくためにはカリキュラム設計という考え方が必要だと考えて、私は今、そこで勝負している所です。

日本の教育政策側にはカリキュラム設計の考え方がありません。文科省が平成 14 年度に「新しい時代における教養教育の在り方について」という中教審答申を出しています。このなかでは、魅力ある教養教育のカリキュラムづくり、という設計視点の言葉が登場していますが、具体的な設計の方法論は書いてありません。このギャップが問題です。

答申にあるカリキュラムづくりの背景にある方法論は何かというと、それはカリキュラムあるいは教育課程の編成という方法です。教育課程編成の方法を一言で述べると、学びの目標という学習行動の行先とは結びつかない形の科目履修表の作成です。科目の配当年次、履修方法、必要単位数、教員の担当コマ数、などを実務的に計算し調整して表を作っていくのがこの方法です。そこには具体的な学習者像は存在しなくていい。であれば、技術的にはこれは教務スタッフに任せれば良い話です。たとえば、日本の初中等教育には学習指導要領という決められた教育課程があるので、学校では教育課程の編成という一律の方法で事足りていたわけです。国が示すカリキュラムの設計図に沿って、あとは決められた大枠のなかで PDCA の考え方で各学校が時間割編成をすればよい。この体制のなかでは、学校現場にはカリキュラム設計の考え方は育たなくてもよかった。大学は設置申請時にはカリキュラム設計の方法は必要で

すが、煩雑な審査資料の作成という特別の実務のなかで行われてきたので、方法論としては育たなかった。そういう状況では、中教審が大学に対しては教養教育のカリキュラムづくりが大切だと言葉で伝えても、それをカリキュラム設計という言葉にまでは明確に踏み込めなかったと、私はそのように理解しています。

今日の皆さんのご報告で面白かったのは、ペア科目の調査で、「学生が楽しむ」とか「深く学ぶ」という論議のところです。これをカリキュラム設計の考え方の論議と捉えると面白い。ところが、もし教育課程の編成という考え方にしか関心がない人には、学生が深く学ぼうが浅く学ぼうが、そのこと自体はまったく視野には入ってこないと思います。むしろ、その視野にあるのは、とにかく学生がきちっと124単位をとって卒業できるような時間割になっているのか否か、科目や履修の種類や数、対応する教室数、常勤・非常勤教員のコマ数などの細かな実務の話です。

本日の議論のような、ペア科目の目的・内容にあった学修時間とか、その科目の学習効率からみて半期か通年かの配当方法の問題とか、そういう考え方を時間割編成にまで及ぶようにするには、カリキュラム設計の視点が必要になります。私は追手門学院大学ではその設計者の役割を担ってみようと試みてきました。ですから、谷垣先生が実施されたアンケートのような情報はカリキュラム設計に反映させたいと思うほど興味をもちました。そのアンケート結果に、「深く学ぶ事ができる」とか「理解を深める事ができる」とか「内容を忘れにくく、頭に残りやすい」という回答がありますが、これは見方を変えれば、受講生にアクティブラーニングが生じているとみることもできます。

ということで、今日の話題のポイントはカリキュラム設計の言葉と考え方の必要性を確認することです。日本の大学にはまだ存在していないカリキュラム設計の考え方を、大学の教養科目の中に、あるいは専門の科目の中に、私たちはどういうふうを導入するか、これから5年、10年のうちにこの考え方を方法論としてどう普及し定着させるか、という観点から話してみます。

確認ですが、カリキュラムづくりという考え方によって、教育の中身を魅力的にして下さい、これが平成14年中教審のメッセージだったと捉えます。ところが、その後、平成20年「学士課程」答申では、学修目標となる学位授与方針を打ち出しながらも、依然として従来のカリキュラム編成の言葉を使っています。カリキュラムづくりの言葉を前進させなかった点で、教育課程に対する考え方では平成14年と平成20年の中教審答申には微妙な断絶というか、停滞があると私は考えます。

平成24年の「質的転換」答申では、単位の実質化で、授業時間外学修を増やすなど、この頃からは中教審のカリキュラム施策はかなりテクニカルになってきます。今では教養教育という言葉もなくなり、学士力とか、汎用的技能とか、能力の評価を優先することで、数量化や技術的なことをドンドン大学に押し付けてきています。これでは、国のカリキュラム改革は大学にとって健全な指針とはならず、大学はこのような施策とはある程度距離を持って付き合うのが賢明だと思います。

2016年の中教審大学教育部会の報告「三つのポリシー策定のガイドライン」からは、カリキュラム編成の言葉は「カリキュラム・マネジメント」や「教育課程マネジメント」の言葉に置き換えられてきています。「編成」がPDCAのプロセスを回す「マネジメント」の言葉で表現されるようになっていきます。各大学がカリキュラムの内部質保証を行うための方法を国から示されたわけです。編成の計画通りに、時間割がちゃんと回っているかどうかを検証しなさいということです。

ここには依然として「設計」の考え方は明確になっていない。私はカリキュラム設計の手法を全国に広めたいと考えて行動を起こしていたので、教育の現場で私が提案する手法が本当に使えるのか実験させてくれる大学がないかと探していたら、可能性が高いと判断した追大からいいタイミングで声がかかりました。赴任して3年になりますが、提案したマッピング手法がカリキュラム改革を推進する教務の現場で使われるようになり、今回お示しするカリキュラムマップを紹介することができるようになりました。

この1年は基盤教育機構長を担当させてもらいましたので、追大の教養教育のカリキュラムについては2019年度からのカリキュラムマップを仕上げることができました。このマップは大区分の科目群を根拠において、その上に学修に期待される目標を書くという考え方です。一つ一つの科目の学びの目標を根拠にすると私たちがどのような学びを期待しているかを伝えることは難しい。科目群の大きなくくりであれば、期待する成果としての学修目標の設定はそれほど難しくはありません。目標設定から設計の考え方が始まることになります。設定した学修目標が達成されるように科目群を編成して開発を含むマネジメントのプロセスを検証していくのがカリキュラムの設計とマネジメントの考え方になります。開発、そのプロセスをマネジメントする考え方です。設計とマネジメントの視点からは、もし目的・目標に沿わなければ、特定の科目を減らしたり、もしくは目的に沿う科目を開発したり、その科目に適切な学修の単位数を増やしたりすることになります。

設計の観点と手法で作成した追大の基盤教育のカリキュラムマップには、カリキュラム担当の学長補佐と基盤の機構長が協働する検討会を幾度か重ねて、人材養成の目的を決め、それが「市民として生涯にわたって自己を形成し続ける活動の基盤を養成する」という内容になります。検討の途中では、ヨーロッパの大学は学問そのものを学ぶことが大事だと考えるので、citizenchip という考え方を強調するのはアメリカ型ではないか、というような広がりのある意見も出ました。この目的を指針にして、カリキュラム全体の科目群の構造とその上に位置づく学修目標を議論していきました。結果としては、カリキュラム構造は三つの科目群から構成しています。それが、ファウンデーション科目群、リベラルアーツ・サイエンス科目群、そして主体的学び科目群の三つです。

ファウンデーション科目は実践的なスキル系の科目です。ここでは外国語とか体育とか情報とかの学びの基礎的スキルの確保が求められているので、学生に身に付けてもらう学修目標は、「市民教養及び専門基礎の学びの基本となる多様なスキルやマインドを確保し実践に生かす」としています。マインドという言葉は強調するのは、スキルとマインドは切り離せないという考えからです。学びの態度が悪ければスキルの修得も低いという関係は経験的にもわかっています。

基盤教育の中心に位置づくリベラルアーツ・サイエンスの科目群では、学修目標は「①人と社会と自然の複雑なかかわりを学際的視点で理解し、現代社会の価値観の多様性と広がりについて学びを深める」と「②学問の多角的なものの見方と捉え方、および学び方の多彩な方法論に出会い生活に生かす経験を積む」の二つにしました。議論では、「学際的視点」の言葉に解釈の違いがあり、それに関しては「学際的な視点で教えるということに重きは置かず、学生が多様な考え方や視点を統合することを学際的視点と捉える」ということで同意してもらいました。それから、「学び方の多彩な方法論に出会い」の言葉については、「多角的なものの見方と捉え方」には方法論が伴うことで実際に生かしてもらえるようになるのではという議論から生まれました。ここまで議論すると、「方法論まで含めると2単位ではなく4単位がいいのでは」という学修時間の問題が自然にでることになります。この科目群でも膨らんだ科目数の削減が課題の一つでしたが、「人文・社会」と「芸術・文化・身体」と「自然」という下位科目区分を再構成して新たな特徴を出しながら、一方では、科目名を例えば「アジアの多文化社会」という大きくくりにしてアジア関連の科目をまとめて、学生から見える科目名の数大きく削減することになりました。

主体的学び科目群とは、大学設置基準42条のルールに基づく学生の社会的・職業的自立を促すための新たな科目区分です。教育課程外で行われる学生支援サービスの学びも含めて使われる「キャリア教育」の言葉とは混用を避けるために、「主体的学び」という言葉を選びました。学生にアピールする学修目標は、「①学習者自らが行動する社会的な学びの場を広げる」、「②中長期の目標にそった自主的・自律的なキャリア開発と選択のためのスキル・態度・方法論を身につける」、「③学習者自らが設定・遂行する学際的課題を体験的かつ協同的に学ぶ経験を積む」、「④帰納・演繹の学びの本質と面白さを体

得する」という四つを設定しました。これらの目標は、学生が自分自身を知り、自分の人生を長期のスパンで計画することを促す、学生が主人公となる科目群だと考えて設定しました。この科目群こそが学習者中心のコンセプトを表象するものです。この科目群では、インターンシップや地域連携・国際交流などのフィールドを視野に入れると就職キャリア課、国際交流教育課などと協働して科目開発することが多くなります。1年次から上級学年に向けてどのような科目編成を協同して企画・開発していくが課題となります。2019年度以降は、専門学部もこの科目群を導入することを大学では決めています。卒論や関連科目はこの科目群の基軸部分に位置づけられます。設定した学修目標を見れば、教師や専門のためではなく学生本人のために卒論を位置づける、ということが明確になります。基盤教育の学修目標のなかでは、例えば、「④帰納・演繹の学びの本質と面白さを体得する」は、リベラルアーツ・サイエンス科目群の上に掲げてもよい内容ですが、いろいろなフィールドを体験するなかでこそ帰納と演繹の方法論を身につけてほしい、ということでここに位置づけています。

カリキュラム設計の考え方には、キャンパスの中にどれだけ教室があつて、担当できる先生がどれくらい必要か、というような実務的な条件を計算することも含まれますが、個々の学生の学修成果を引き上げるためには、学修目標に沿うように科目を適切に企画・編成する、特定の科目については内容・方法を組織的に開発する支援策も含まれます。その意味では、これは教育現場で仕事をする教職員一人一人はもちろんのこと、経営陣もかわらざるをえない考え方です。これまでのような科目編成と時間割作成の考え方だけに囚われると、学生の履修科目の配列や履修指導、成績判定・発表のプロセス管理からは一歩も抜け出せないことになりそうです。追大ではカリキュラムマップの手法の考え方を理解する人が徐々に増えていますので、学生のニーズに対応するような科目開発も受け入れられやすくなるでしょう。

今日はいい機会を頂きました。龍大にはこの研修会に3度呼んでいただいていますけども、参加されていらっしゃる先生方の話題提供や議論の内容を聞きながら、振り返ればカリキュラム設計の考え方から受けとめてきたのが私の基本スタンスだったと思います。なぜペアの4単位科目が必要なのか、この問いは組織におけるカリキュラムの設計の考え方のなかから解決の方向がみえてくるのではないかと考えます。これを再度強調して、本日の話を終わらせていただきます。

質問：学生がそれぞれバランス良く取るような…（さっき学生が自由に取るって）学生だったら多分偏って取りますね。その辺りはどういう風に…。

答え：履修の順序の事ですか？追大では履修にかかわる学生個人の統合データを専門部署で整備しつつあります。まずは履修パターンと成績データの分析を行って、偏りのあるパターンが明らかになったら、改善提案ができるのではないかと考えています。それはこれからの話です。

質問：それは個々の学生をそうやって、これは あなたはコレが足りないからコレを取りなさいと言う様な？

池田先生：改善提案は執行部に行い、それを受けて担当の先生が学生に説明して、履修指導に活かしてもらうことになると思います。履修パターンの分析のためには、カリキュラムマップをベースにする科目ナンバリングのコード化が必要ですから、この作業を来年から始める予定です。

質問：かなり密に付き合う、面談するとか、例えば学期の終わりに面談するとか、こういうことをやられていると言うことでしょうか？

池田先生：できれば履修している段階で好ましくない履修パターンの学生には、タイムリーにチェックがいくような体制になるとよいのですが。そういう方向性は学内で話が出ています。具体的にも、学生の履修行動にかかわるカルテの開発や履修の成果にかかわるポートフォリオの開発が経営陣の視野にあって、進行しつつあります。しかし、効果がでるようになるにはもう少し時間がかかるでしょう。

質問：履修指導を行うのは教員ですか？それとも教務の職員さん？

池田先生：指導は先生方ですが、カリキュラムの全体を読める教務スタッフがデータチェックをする体制が必要です。そういう仕組みの必要性が理解されるようになってきましたが、指導をする先生方にはまだ共有できてはいません。カリキュラム設計やその方法としてのマッピング手法についても浸透はこれからの段階です。

最後に私からの質問ですが、竹内先生の報告資料の「終わり」の部分に書かれていますけども、「宗教（現象）」という表現がありますね？学生の目から見たら「冷たい書き方されているなあ」「そんなに冷たくていいの」と、正直に言うと私はすごくドキッときました。言葉の内容としても、これはどういう現象なのか、ちょっと気になりました。それから、これは感想ですが、「深める」という言葉についてです。これはディープラーニングという言葉が今は教育の専門家では話題になっていますから敢えて述べます。「深める」は基本的な概念を学んだ上で、それを活かす方法論を学ぶという二段階の学びではないかと私自身は考え始めています。それとペアで議論される「広げる」という言葉は、色んな多彩な科目に出会う、出会って刺激を受ける。一つの科目の中よりは、むしろ学際的視点を獲得することに「広げる」の言葉を使っていきたい。そういうこだわりを持っています。

竹内：ここで言っているのは、冷たく見ることが出来ることを学ぼうということです。深める表現はおっしゃった通りだと思うのですが、宗教学に関しては、宗教現象といっても色んな現象がありますので、おっしゃるように、宗教学的な視点を勉強の中で活かすことができるようなのを「深める」と言いたいと思います。

池田：はい。納得です。

(文責 上垣 豊)

以上